

## 第五章 藤壺の物語 法華八講主催と出家

[第一段 十一月一日、故桐壺院の御国忌]

中宮は、院の御果ての事(おんはてのこと、一周忌)にうち続き、\*御八講の(みはっこうの、読経会の)いそぎ(準備)をさまざまに心づかひせさせたまひけり(方々に手配させなさいました)。\*注に<『法華経』全八巻を朝座・夕座の二度、四日間連続講説する法会。>とある。

霜月の朔日ごろ(しもつきのついたちごろ、十一月初旬の)、御国忌(みこつき、故院の御命日)なるに(という日は)、雪いたう降りたり(大雪になりまして)。大将殿より宮に聞こえたまふ(源氏から中宮にお手紙がありました)。

「別れにし今日は来れども見し人に、行き逢ふほどをいつと頼まむ」(和歌 10-26)

「命日悲し雪景色、いつ解けるかと春の日を待つ」(意識 10-26)

\*注に<源氏から藤壺への贈歌。「ゆき」は「雪」と「行き」の掛詞。「行き合ふ」は来世で再会する意。桐壺院に再会しえない悲しみの歌。>とある。「故父院の御命日を迎えました但懐かしい父には、何時の日かあの世でお会いする日を待つばかりです」という表向きの歌詠みに、雪の日に託けてか「ゆきあふ」を「雪合ふ(白氏に戻す=わだかまりが解ける)」に掛けて、<また会いたい>という思いを滲ませる。ただし中宮は其の源氏の複意は無視して、表向きの故院の御命日の挨拶に対してだけ応える、のだろう。

いづこにも(中宮にしても)、今日はもの悲しう思さるるほどにて(故院の御命日は物悲しい日だったので)、御返りあり(御返事が在りました)。

「ながらふるほどは憂けれど行きめぐり、今日はその世に逢ふ心地して」(和歌 10-27)

「雪解けを待つ心より、雪に溶け込みたい思い」(意識 10-27)

\*やはり中宮は源氏の複意を完全に無視して、故院の命日という事に対してだけ返歌を詠んだ。源氏が「ゆきあふほどを(わだかまりが解けて会える日が)いつとたのみむ(何時の日になるかと楽しみにしています)」と恋慕を滲ませて来ても、中宮は「ゆきあふほどを」には「ゆきめぐり(雪の日になったので)」と受けて、「いつとたのみむ」には「今日は(今日こそが)その世に(彼の世の故院に)逢ふ心地して(行き逢える気がします)」と応え切っている。前節の「永らふるほどは憂けれど」は表向きはく生き永らえているのも心苦しいですが>という意味で「ながらふる(長く降る)ゆきめぐり(雪景色)」に情緒良く掛かる一見あっさりとした返礼になっているが、暗意ではく何時までも言い寄るのは鬱陶しい>という相当なダメ出しでもある。

ことにつくろひてもあらぬ御書きざまなれど(格別に気を配ってはいない御筆跡だったが)、あてに気高きは思ひなしなるべし(上品で立派に見えたのは源氏の思い入れの所為だったのでしょう)。\*筋変はり今めかしうはあらねど(複意をはぐらかされるのも事改まったものではなかったが)、人にはことに書かせたまへり(やはり中宮の手紙は源氏には格別で

した)。今日は(今日ばかりは源氏も)、この御ことも思ひ消ちて(恋慕は押し殺して)、あはれなる雪の雫に濡れ濡れ行ひたまふ(趣き深い雪の雫の風情のように涙を滴らせて故父院の命日を偲んで追善法要を行いなさいました)。\*「すぢ」は<作風>ともあるから<字の趣き=書風>であり、「かはり」は<独特で>で、「今粧しう」は<今風>だから、「筋変はり今めかしうはあらねど」は<書風が独特で今風ではなかったが>なのだが、此処の文は「ことにつくろひてもあらぬ御書きさま」を今さら筆跡の事としてわざわざ説明する意味は殆ど無い、と思われてならない。「すぢ」は<意味あい、事の趣き、文意>であり、此処での言い回しは一種の洒落言葉なので、敢えて裏意を言い換え文とする。

[第二段 十二月十日過ぎ、藤壺、法華八講主催の後、出家す]

十二月十余日ばかり(しはすのとをよかばかり)、中宮の御八講なり(中宮が法華八講の読経会を催しなさいました)。いみじう尊し(とても有難い法要でした)。日々に供養せさせたまふ(開會中毎日供養の為に読まれる)御経よりはじめ(経巻からして)、玉の軸(美しい軸に)、羅の(らの、薄絹で)表紙(へうし、表を覆った)、帙篋(ちす、簾竹筒)の飾りも、世になきさまに(他に例を見ないほど立派に)ととのへさせたまへり(作らせてありました)。

さらぬことのきよらだに(そうでなくても整然となさっている中宮なので)、世の常ならずおはしませば(こうした特別な法要であれば)、ましてことわりなり(其れも当然の事でした)。仏の御飾り(仏像の奉り方や)、花机(お供え台)のおほひなどまで(の飾り布まで)、まことの極楽思ひやらる(本当の極楽かと思えるほどでした)。

初めの日(読経の初日は)、先帝の御料(せんだいのごれう、中宮の父なる先代の帝の供養)。次の日は、母後の御ため(中宮の故母後の供養)。またの日は(其の次の日は)、院の御料(故院の供養)。\*五巻の日なれば(そして其の三日目の朝座は五巻目の読経日なので)、上達部なども(朝廷の要人たちも)、世のつつましさを(中宮を嫌う右大臣家の権勢を)えしも憚りたまはで(憚って遠慮しても居られず)、いとあまた参りたまへり(それは大勢が講座に参列なさいました)。\*「法華八講座」については大辞泉に<法華経8巻を8座に分け、ふつう1日に朝夕2座講じて4日間で完了する法会。八講会。八講。>とある。したがって三日目の朝座は五巻目の読経である。その内容までは不明だが、注には<その朝座は『法華経』第五巻を講じる日なので、上達部他大勢参加。最終日の第四日は自分のために行う。>とある。良く分からないが、現政権の権勢を超えた天台宗の基本的な権威が当時の社会構成上で認められていたのだろう。

今日の講師(かうじ、読み手)は、心ことに選らせたまへれば(特に優れた僧を選び出させていらしたので)、「薪こる」ほどよりうちはじめ(\*薪の行道の歌が始まると)、同じう言ふ言の葉も(同じ様に列席者が唱和して繰り返す歌の響きも)、いみじう尊し(大変に荘厳なものでした)。\*「薪の行道(たきぎのぎょうどう)」とは<法華八講の第三日目に、奈良時代の大僧正であった行基(ぎょうき)の作とされる「法華経をわが得しことは薪こり菜つみ水汲み仕へてぞ得し」の歌を唱えながら、薪を背負い水桶を担った者が、僧たちの後に加わって行進する行事。>と小学館古語辞典にある。「薪樵(たきぎこる、焚木を切る)」は法華経を修める為の修行の歌の文句、という事らしく、八講第三日目なので「薪の行道」が行われた事がこの直後の描写からも知れるが、こういう語りで聞き手が分かるほど

法華八講や薪の行道は当時の宮廷人にとっての一般常識だったのだろうか。仏教は先進概念というよりも、祭祀としての神道とは別の統治方法で、平安京の基軸だったのかも知れない。

親王たちも(みこたちも、参列していた故院の子息たちも)、さまさまの捧物(ほうもち、供物を)ささげてめぐりたまふに(捧げて僧たちの後に続いて行進されたが)、大将殿の御用意など(源氏の奉物や服装に)、なほ似るものなし(匹敵する優れたものはありませんでした)。常におなじことのやうなれど(いつもいつも源氏が素晴らしいと同じ事を言うようですが)、見たてまつるたびごとに(押し上げる度ごとに)、めづらしからむをば(目を引いてしまうのは)、いかがはせむ(どうしたことでしょう)。

果ての日(講座最終日の四日目に本講座が)、わが御ことを(中宮ご自身の事を)結願(けちぐわん、発意して立願した講座の修行)にて(であった事として)、世を背きたまふよし(出家なさる事を)、仏に申させたまふに(仏前に僧から報告させなされたので)、皆人びと驚きたまひぬ(参列の人々はみな意外に御思いに成りました)。兵部卿宮、大将の御心も動きて、あさましと思す(慌てて呆れなさいます)。親王は(兵部卿の兄宮や大将はじめ帝の弟宮たちは)、なかばのほどに立ちて(結願式途中で席を立ち)、入りたまひぬ(中宮の簾中にお入りなさいました)。

心強う思し立つさまのたまひて(中宮は兄宮たちにご決心の固い事をお話しになって)、果つるほどに(式の終わりに)、山の座主(叡山の座主を)召して(招かれて)、忌むこと受けたまふべきよし(剃髪をお受けに成る事を)、のたまはず(お述べになります)。\*御伯父の横川の僧都(おほむをぢのよかはのそうづ)、近う参りたまひて(簾中の中宮に近付かれて)、御髪下ろしたまふほどに(剃髪を施されると)、宮の内ゆすりて(宮邸中が揺れて)、ゆゆしう泣きみちたり(すすり泣く声が満ち渡りました)。\*注に<藤壺は先帝の四宮であるから、母方の伯父(叔父)であろう。>とある。

何となき老い衰へたる人だに(ごく普通の年老いた人の場合でも)、今はと世を背くほどは(いよいよ今こそと出家する時は)、あやしうあはれなるわざを(独特の寂しさがあるものを)、まして、かねての御けしきにも(前もっての表情には)出だしたまはざりつることなれば(お出しに為らなかつた事なので)、親王もいみじう泣きたまふ(兄宮たちも頻りに御泣きなさいます)。参りたまへる人々も(参座為された高官たちも)、おほかたのことのさまも(大后と右大臣家の意向からして)、あはれ尊ければ(中宮が東宮を案じての事と察せられたので)、みな、袖濡らしてぞ帰りたまひける。

故院の御子たちは(故院の子息である帝の弟宮たちは)、昔の御ありさまを思し出づるに(中宮が父帝に寵愛されていた姿を思い出しては)、いとど、あはれに悲しう思されて(ますます今の変わり様を悲しく御思いに成って)、みな、とぶらひきこえたまふ(中宮に慰めの言葉をお掛けになります)。大将は(しかし源氏は)、立ちとまりたまひて(身動きできず)、聞こえ出でたまふべきかたもなく(お言葉を掛ける事も出来ずに)、暮れまどひて思さるれど(暗然とされていたが)、「などか、さしも(どうして、それほどに悲しむのか)」と、人見たてまつるべければ(人に怪しまれかねないので)、親王など出でたまひぬる後にぞ(宮様た

ちが御帰りに成った後になって)、御前に参りたまへる(中宮の居間に伺いました)。やうやう人静まりて(ようやく人も落ち着いてきて)、女房ども、鼻うちかみつつ(涙ぐんで鼻をかみながら)、所々に群れみたり(数箇所固まって座っていました)。

月は隈なきに(月は陰りもなく光り)、雪の光りあひたる庭のありさまも(雪を照らし出す庭の景色も)、昔のこと思ひやらるるに(昔を思えば)、いと堪へがたう思さるれど(源氏には耐え難く思えたが)、いとよう思し静めて(どうにか気を落ち着けて)、「いかやうに思し立たせたまひて(いかに出家を思い立たれたとしても)、かうにはかには(こう俄かには、驚きました)」と聞こえたまふ(とお聞かせ申します)。

「今はじめて(何も急に)、思ひたまふることにもあらぬを(思い付いたものでは在りませんが)、ものさわがしきやうなりつれば(噂話で周りが騒がしくなるとは)、心乱れぬべく(その応対が面倒でしたので)」など(などと中宮は)、例の(いつものように)、命婦して聞こえたまふ(王命婦を介してお応えになります)。

御簾のうちのけはひ、そこら集ひさぶらふ人の衣の音なひ、しめやかに振る舞ひなして、うち身じろきつつ(女房たちが身の置き所も無く)、悲しげさの慰めがたげに漏り聞こゆるけしき(悲しみを慰め切れなさそうに忍び泣く様子は)、ことわりに(無理も無い事と)、いみじと聞きたまふ(源氏は感慨深くお聞きになります)。

風、はげしう吹きふぶきて、御簾のうちの匂ひ、いとも深き(とても奥ゆかしい)\*黒方(くろほう、薫き物の香)にしみて、名香(みやうがう、仏前香)の煙もほのかなり(の匂いも仄かに漂っていました)。 \*「黒方」は<薫物(たきもの)の名。沈香(じんこう)・丁子香(ちょうじこう)・甲香・白檀(びやくだん)・麝香(じゃこう)などを練り合わせて作る。幽玄さをあらわす冬の香といわれる。>と古語辞典にある。

大将の御匂ひさへ薫りあひ(だいしゃうのおもむにほひさへかほりあひ)、めでたく、極楽思ひやらるる夜のさまなり(仏の国が偲ばれる夜の風情でした)。

春宮の御使も参れり。のたまひしさま(東宮御所で春宮と御話し為された時の事を)、思ひ出できこえさせたまふにぞ(中宮は思い出されて居らしたようで)、御心強さも堪へがたくて(若い春宮が変わった自分の姿を如何思うかと思えば、出家を決行なさった強気も張り通せず)、\*御返りも聞こえさせやませたまはねば(御返礼も申し上げかねていらしたので)、大将ぞ、言加はへ聞こえたまひける(源氏が口添えを申し上げなさいました)。 \*「おんかへり」は御使への挨拶ではなく春宮への御返礼なのだから、源氏の「ことくはへ」の場面説明が下文へと続いて、次の歌こそがその中身という構成なのだろう。

(とは言うものの)誰も誰も、ある限り(この場に居る者は誰も)心収まらぬほどなれば(冷静ではなく感傷に浸って過敏になっていたのも、自分が春宮の父と気取られかねないような迂闊な事は言えないと考えて)、思すことどもも(源氏は心の内を)、えうち出でたまはず(思うようには言い出せません)。

「月のすむ雲居をかけて慕ふとも、この世の闇になほや惑はむ (和歌 10-28)

「故院を慕う出家でも、我が子を忘れる事は無い (意識 10-28)

\*是は中宮および東宮の世話役たる源氏大将が東宮に対する中宮の代弁として考えた歌、という設定になっている。従って先ずは中宮に、こういうお気持ちではないですか、とお伺いを立てる場面である。話の読者ないし聞き手は、春宮が中宮と源氏との間に出来た子だと知っているから気を揉むが、周りに侍る女房たちは飽く迄も大将を宮様の世話役として見ている、という事情を踏まえて是を読むべきなのだろう。すると、「月となった故院が御座します天に近付きたいと高い志で出家しましたが、此の世に御座します我が子の治世を案じると未練で暗がりに困惑します」、と読める。此処には源氏自身の気持ちは微塵も無い、としなければ大事件となる歌である。

と思ひたまへらるる\*こそ(というように御思いかと私には存じられますが)、かひなく(それにしても、)。思し立たせたまへる恨めしきは(出家なされてしまった事は残念で)、限りなう(なりません)」とばかり聞こえたまひて(とだけ源氏は中宮に申し上げて)、人々近うさぶらへば(女房たちが近くに控えていたので)、さまざま乱るる心のうちをだに(自分の複雑な胸中までは)、え聞こえあらはしたまはず(とても言い表す事が出来に為れず)、いぶせし(不本意でした)。\*この「こそ」は<～ことこそが>という強調ではなく、相手を否定して傷付けることが無い様に気遣って遠慮がちに言う反語で、例えば<～とは思いますが、ですが>みたいな感じかと思う。なので、「甲斐なく」も<無駄だ、仕方がない>という額面どおりの意味ではなく、定型の導入句のようなもので、例えば<ただ…>みたいな感じ。したがって、此処は句点をつける文節ではない、と思う。

「おほふかたの憂きにつけては厭へども、いつかこの世を背き果つべき (和歌 10-29)

「出家で俗世を離れても、思い切るのは何時の事やら (意識 10-29-1)

「これで懸念は減らせても、果てるものとも限らない (意識 10-29-2)

\*「よをそむく」は<出家する>という意味らしい。しかし、謀反にも通じる語感がある。まして皇太子の立場では謀反は決して絵空事でも無く、それだけに危険で恐ろしくも見えるが、敢えてこう詠むには<順当な御世代わり>と読めることが前提なのだろう。実際に出家したからこそ、その疑いが免責されてこう詠めた、ということののだろうか。良く分からない。

\*かつ(いずれにしても先の事は分からないし)、濁りつつ(なかなか未練を断ち切れませぬ)など(などと御自分の未熟な心情を示す中宮のお返事は)、かたへは御使の\*心しらひなるべし(同時に春宮の御使に事情を説明したものであったのでしょう)。\*「かつ」は何か複数ある事を示し、その内の一つを<先ず>と言う副詞、のようだ。「かたへは」が<もう一つは>であることに構文上の整合性がある、のではないだろうか。しかし、意味合いは複雑で言い換えは難しい。\*「こころしらひ」は<心に応答する=疑問に答える>、かと思う。

あはれのみ尽きせねば(悲しみだけが湧いてきて)、胸苦しうてまかだたまひぬ(源氏は居た堪れずに宮邸を去られました)。

## [第三段 後に残された源氏]

殿にても(とのにても、二条院に帰り着いても)、わが御方に(西の対へは行かずに自分の部屋の東の対で)一人うち臥したまひて、御目もあはず(お眠りにも為れず)、世の中厭はしう思さるるにも(世の中に嫌気が差して出家を思い立たれても)、春宮の御ことのみぞ心苦しき(春宮の後見の事だけが気掛かりでなりませんでした)。

「母宮をだに朝廷がたざまにと(故院は東宮の為にせめて母宮だけは公式の地位に据えようと)、思しおきしを(思い置かれて中宮に成されたものを)、世の憂さに堪へず(右大臣家の権勢に追い落とされて)、かくなりたまひにたれば(出家なさってしまわれたので)、もとの御位(みくらい、後の地位)にてもえおはせじ(にはとても御留まりには成れないだろう)。我さへ見たてまつり捨てては(この上自分までが出家して後見申し上げなくなってしまつては、春宮の身が案じられる)」など、思し明かすこと限りなし(夜通し考えても結論ができませんでした)。

「今は、かかるかたざまの(出家為された宮に尼僧用の)御調度どもをこそは(調度類をご用意致さねば)」と思せば(と源氏はお考えになって)、年の内にと、急がせたまふ。命婦の君も御供になりければ(王命婦も御供で出家したので)、それも心深うとぶらひたまふ(そちらにも懇ろに心遣いして品物を御贈りなさいます)。詳しう言ひ続けむに(詳しい事は)、ことことしきさまなれば(細かい事なので)、漏らしてけるなめり(話を聞いた者が聞き洩らしてしまったようです)。\*さるは(とはいえ)、かうやうの折こそ(こうした時こそ)、をかしき歌など出で来るやうもあれ(良い歌などが詠まれたりすることも在りそうですが、それも無く)、さうざうしや(物足りない事です)。\*まるで、テレビの Reporter みたいな口調だが、これは臨場感を与える演出だろうか。もしかすると、本当に類似事件のルポかも知れない。

参りたまふも(その後に、源氏が三条の宮邸に伺うと)、今はつつましさ薄らぎて(出家して世俗を離れた今は宮の頑なさも薄らいで)、御みづから聞こえたまふ折もありけり(取次ぎも介さず御自身が直接御話しになる時も在りました)。思ひしめてしことは(源氏の恋慕は)、さらに御心に離れねど(今でも失せては居ませんでした)、まして(禁忌の戒めは今更に増して)、あるまじきことなりかし(尼僧との情交などは、決して在っては成らない事なのですから)。